

「レイモンド・カーヴァー」というアメリカを追いかけて(3)

YODA, Takeshi / 余田, 剛

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

111

(終了ページ / End Page)

151

(発行年 / Year)

2018-01-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014334>

「レイモンド・カーヴァー」という アメリカを追いかけて (3)

余 田 剛

7. ビート族警官の死

ワシントン州ブレインへ向かう前の1961年5月、レイモンド・カーヴァー (Raymond Carver, 1938-1988) が作家として有名になる以前の無名時代に突如「アメリカ」という全国規模の社会と急接近するかののような事件が身近に起こった。

妻メアリアン (Maryann) の妹エイミー・バーク (Amy Burk) が発端であった。彼女が当時ハリー・オリフ (Harry Olliffe) という男性と交際しており、彼とはカーヴァー一家もクリスマスを共に過ごし結婚も視野に入れた家族ぐるみの付き合いをしていたようであるが (M. Carver 138-41), 5月11日、彼が別居中の妻に射殺されるという事件が起こり、新聞でも大きく取り扱われる。妻の訴えでは日常で繰り返されたハリーの異常な性的要求と暴力に耐え切れなくなったことが動機とされ (Raudebaugh 1), 話題性は十分あったが、これはただの一般人によるスキャンダラスな事件にはとどまっていなかった。当時私立探偵であったハリーが、かつてビート族の麻薬取締のために自らビート族の格好をして摘発するという覆面捜査員を2年前に8か月務めていたことがあり (1), バイエリアでは当時有名な人物だったことが (M. Carver 141), 話題性をさらに増幅したと容易に推測できる。新聞は彼を「ビート族警官 (Beatnik Cop)」と呼んでいる。

5月12日付の記事 (図版1) の翌日13日付の記事 (図版2) には、「もう一人のブロンド (“other blonde”)」としてエイミーの写真が載り、彼女の家へは取材陣や一般人も押し寄せてきて、彼女のみでなくカーヴァー一家も突如大きな混乱の渦にのみ込まれてしまう (M. Carver 148-49)。

102E 14 SAN FRANCISCO CHRONICLE, Friday, May 12, 1961 CCCCAL

'Beatnik Cop' Is Slain By Wife--With His Gun

Sex Demands'

Continued from Page 1

Two bullets into him, she said police.

One bullet hit his chest, severing the aorta. The other went through his shoulder.

He said nothing, turned, crossed the porch, went down the stairs, and walked to feet toward the sidewalk before he collapsed.

He was dead when police, summoned by a phone call from Mrs. Olliffe, arrived at the scene. She called San Mateo Sheriff's Inspector William Moran, a close friend, and he notified the Redwood City Police.

Officers found her sitting in the darkened living room in her nightgown and dressing robe, the pistol in her lap.

"I couldn't stand it any longer," she said. "I was at the end of my rope."

"She was quiet into this," her defense lawyer told The Chronicle last night.

She will plead not guilty on grounds of self defense, the attorney, John Curt, said after a pair of brief conferences with Mrs. Olliffe in the San Mateo county jail.

Police said the couple had been married for six years and had no children. There had been domestic difficulty for a year, and Olliffe had moved out the last time six weeks ago.

He was kept on the Sheriff's office payroll until the cases were cleaned up, and then was dismissed. He worked variously thereafter as a watchman, an insurance investigator in San Francisco, and as a swimming instructor.

"He was in and out of the Red Barn all day Wednesday," said Redwood City Police Chief William Faulstich. "I don't know whether he carried a gun after being ever seen. But he didn't seem warned against it."

His wife said he brought the gun home two weeks ago in a suitcase of dirty laundry he ordered her to wash.

She and her husband had beaten her throughout their married life, and now before they were married. They met while attending Burlingame High School.

Her parents now live in Boston. Olliffe's parents and a brother live in Burlingame.

MURDER CHARGE

Mrs. Olliffe, who is a stenographer in a Peninsula insurance firm, was booked at the San Mateo County Jail on a charge of murder.

She was taken before Municipal Judge Frank Conrath

Cahill Reports Slight Drop in Major Crime

A slight decrease in major crimes in San Francisco from March to April was reported by Police Chief Thomas Cahill yesterday.

Officers reported 10 police numbers 2551 in March and 2485 last month. April was the fourth consecutive month to show a decrease.

Declines in April were recorded in all major categories except grand theft, which increased to 104 from 76 in March.

Civil Air Patrol

San Bruno Landing California averts will participate day-long Open House Seminar at by San Mateo Democrats in San Francisco.

The keynote speaker Attorney General Mosk, who will address opening of the afternoon at San Bruno's school at 1:40 p. m. Five panel discussion.

Barry Ashton's production

図版 1 私立探偵と覆面捜査員のそれぞれの仕事をしていた時の格好を並置したハリリー・オリフ（右上）と妻サリー（左）の写真とともに事件を報じた記事
 出典：Charles Raudebaugh, "Beatnik Cop' Slain by Wife — With his Gun" *San Francisco Chronicle* (12 May 1961: 14, print).

メアリアンもスクレニカも、この経験に基づきカーヴァーの短編「ハリリーの死 ("Harry's Death")」(『炎 (Fires)』所収) が書かれた、としているが (M. Carver 149; Sklenicka 79), この伝記的事実があることを知ればだれでも着想を得た下敷きになっていることは否定しないだろう。問題はどこまでつながて考えるかである。

物語のあらすじはおおよそ以下のようなものである。自動車修理工場の仕事仲間であったハリリー (Harry) が亡くなり、その死がラジオやテレビで報道されている。語り手はハリリーを含む仲間たちと行きつけであったバーで、大きなショックをなだめあうかのように彼のことを語り合う。そのバーにハリリーと親しくしていたリトル・ジュディス (Little Judith) という女性がやってきて、



図版 2 エイミー・パークの写真が掲載された記事

出典: "The Beatnik Cop's Other Blonde Talks" San Francisco Chronicle (13 May 1961: 1, print).

語り手が慰める。その後は急展開で、毎日ジュディスと会っているうちに親しくなり、ハリーが叔父から相続して妻ではなくジュディスに相続されるよう手続きしていたヨットで、籍を入れた後2人で旅に出るものの、ジュディスは、海の上である日突然消えてしまい、語り手が結局ヨットを所有し現在メキシコを旅している、という結末で締めくくられる。

ハリーという人物の特徴は以下のようなものとどめられている。

Harry was an operator. That is to say he always had something going. It was never a drag being around Harry. He was good with women, if you know what I mean, always had money and lived high. He was sharp too and somehow he could always work it around so that in any deal he came out smelling like a rose. (ハリーはやり手だった。つまり彼はいつもなにかしらの取引をしていた。ハリーのそばにいと決して退屈しなかった。もうおわかりだろうが、彼は女の扱いがうまかったし、いつも金を持っていて贅沢に暮らしていた。彼は利口でもあり、いつもなんとかうまくやってのけどどんな取引でも無傷で切り抜けてしまうのだった。) (*Fires* 158)

作品においては伝記を特徴づける「ビート族」, 「元警察官」, 「自分の義理の妹が殺された男の愛人であった」といった要素がおとされ、ただの要領のいい金を持った色男が亡くなり、彼と生前親しくしていた女性が悲しみに暮れ、2人を知っているある男がその後どう女性に関わるか、というシチュエーションだけが抜き取られている。リトル・ジュディスはそもそもハリーの愛人であるとも明言されておらず、メアリアンやスクレニカの伝記が出版される前には、ジュディスをハリーの「娘」であると解釈する批評家もいる (Meyer 117; Saltzman 60)。愛人ととったほうが、上記引用の「もうおわかりだろうが、彼は女の扱いがうまかったし」という意味ありげな表現が生きてくるのではあるが、しかし、愛人であるとの断定を阻むほど薄い設定になっていることも確かである。

このように「ハリーの死」は、伝記のエピソードの特異性を抜き取って、かなりあく抜きされたより一般性の強い話として提示されている。物語中のハリーは、彼を有名人にするほどの特殊な仕事をしていたとも限定されていないし、ジュディスが愛人なのかどうかははっきりしない。しかし、ハリーが哀れな死を遂げ周囲からの死の直後の同情が冷やかな態度に急変する、という外郭部分は引き継ぎながら、細部の特殊な設定のみなくしたことで、ストーリーのつながりに分かりにくい個所が生じている。

ビート族の真似がうまく実生活でも社会規範を逸脱した行為にふけていた人物でないと、報道機関でも取り上げられるほどショッキングな死に方をしに

くいであろうし、警官とビート族、愛想のいい優しい恋人と暴力夫、といった表裏の激しい二面性を持った人物でないと、死の衝撃により冷ややかな態度へと一転する周囲の反応の変わり具合も似つかわしくないだろう。しかし、娘と親しくしていたただの要領のいい感じのよい男では、人生を別の男に乗っ取られてしまうという仕打ちは一見やや惨く理不尽に思え、人生とは理不尽なものなのだというのがテーマであると解釈できなくもないが、それにしても、不慮の事故死なのか、自業自得の死なのか、死因も示されておらず、どう理不尽なのか設定がされきっていないため、そもそも理不尽なのかも決めきれない側面がある。

したがって、カーヴァーがもし実際のエピソードから部分だけを借りてそこから一種の「ハリー・オリフの物語」ではない誰にでも起こりうる普遍的な物語を創り出したかったのだとすると、出所となる人物やストーリーの特殊性が強く、どこにでも起こりうる話のベースとして選択を誤ったのではないかと言いたくなるのである。それほど、実在のハリーの物語のあくは強い。逆に、もしカーヴァーが実際の一連の特殊な経験から受けた衝撃を伝えたいがために、多かれ少なかれ伝記的な一種の「ハリー・オリフの物語」を創り出したのだとすると、その経験を特殊にしえた特殊な設定が、今一つ足りなかったように思える。

かつて警官でありビート族の格好をしてビート族を取り締まっていたように実在のハリー・オリフと経歴を同じに設定しないまでも、たとえば、ハリーはかつて役所の職員や巡査などいわゆる「体制側」の人間であったがそのお硬い仕事に反して規範にとらわれない破天荒な性格により首になっていまのの仕事に落ち着いた、とか、かつての違法な行為が災いしある人間から恨みを買って殺されてしまったといったように想定するなど、カーヴァーが着想を得た現実に、より近い設定がなされていたら、少なくともストーリーのプロットはよりしまりがよくなっていたことだろう。

もちろんそのようなより伝記臭の強いストーリーはカーヴァーの好みではなかったかもしれないし、創作の観点からここをもっとこう直すべきといった恐れ多いことをすることがここでの目的ではない。ここでやっておきたいのは、むしろ、伝記は現実の世界で実際に起きたという意味でその展開の迫真性を一度ためされたものでそれなりに「リアリティー」の度合いが高いと言えるがゆえ、「ハリーの死」のように、着想を得たとおもわれるエピソードがかなりはっ

きりしている場合は特に、伝記上の出来事と近すぎてもオリジナリティーがないことになるし、また「ハリーの死」が該当するように部分的に改変されより精度の高い伝記というストーリーとフィクションのそれに差が生じていても、一度完成したストーリーをいじることでプロットに齟齬をきたしやすくなり、いずれにせよ伝記の存在感と影響力は大きく、伝記とフィクションは別物だから切り離して考えるべき、という一言ではすまされない、ということを確認することである。そして、その影響力を認めた上で、作中で直接社会問題を扱うようなことをしていなくとも、登場人物ハリーの向こう側にビート族やそれを取り締まる体制側の存在を読み取り、カーヴァーがそれらにどんなスタンスをとっていたか、あるいは、社会の中でどういった立場にある人物に目をつけていたかを探りとってみる、ということである。

まずは、実在のハリー・オリフが当時の社会の中でどのような存在として位置づけられるかを整理してみる。ビートからヒッピーが誕生するところから流れを追ったヒッピーの概説書『ヒッピー族 (*The Hippies*)』の中でバートン・ウルフ (Burton Wolfe) は、ハリー・オリフの事件が取り扱われた新聞の記事を引用している。当時、マリファナパーティー、みすばらしい異様な身なり、乱交、詩朗読の秘儀的集まりなど、因習的規範を無視したビートの奔放な生活スタイルに対する違和感から、実際は人数的にさほど脅威を与える存在でなかったにもかかわらず、マスコミにより必要以上に不安があおられ、彼らを排除する社会的な風潮が強まってゆき、その流れが彼らをサンフランシスコのノースビーチ (North Beach) からヘイト・アシュベリー (Haight-Ashbury) へと追いやり、やがて60年代に入ってヴェトナム戦争も勃発し、いつしか「ビート」を母体とした集団が「ヒッピー」という呼称で知られるようになるまでの変遷過程を、ウルフは本の序盤で概観する (15-34)。そのビート排除のプロセスの中で、警察がビート族をつるし上げることが最初から目的として捜査員を麻薬コミュニティーに送り込み違法行為をある意味焚きつけさせておいて最後には逮捕するという、姑息な手段を使った過熱した取り締まりも行われていたが、オリフ事件はその1例として紹介されている (17-19)。オリフが覆面捜査員として潜入捜査を行ったという記事と、そして、その約2年後に彼が妻に殺害された事件ならびに彼の素行不良の履歴が紹介された記事の引用に続き、ウルフは以下のような説明を加える。

For the beatniks, it was sort of a vindication, even a purge from a society they considered rotten, that a hero in the campaign against them was vilified in the end, a reverse of the cowboy-Indian movies that dominate the American good guy-bad guy ethic. (ビート族に敵対する運動のヒーローが最後には新聞で悪く書かれたということは、つまりアメリカの善人対悪人の倫理感を決定づける、カウボーイ対インディアンの映画にどんでん返しが起きたということであるが、その中傷によるどんでん返しは、ビート族にとっては、いわば社会による自己正当化を意味し、彼らが腐敗していると考えていた社会からかつてのヒーローが追放されたということすら意味していた。) (19)

このように実在のハリー・オリフは、体制側のビート族に対する取り締まり行為とそれを進めた社会風潮の象徴的存在であると読み取れる。一方で、一時期ヒーローに祭り上げられていただけでいったん事件を起こしてしまうとスケープゴートとして社会から切り離されてしまったような存在でもあり、ビート族が仲間と間違えるほどその真似がうまくできてしまい、日常生活においても規範を逸脱した行動が目立ち、ビートの性質をもともと持っているような人物であるとも読み取れる。

作中のハリーはどうだろうか。実在のハリーのように体制側を代表させられてしまうような存在ではないが、自動車修理工として働きなせかは詳しい説明がないが「いつも金を持っていて贅沢に暮らして」おり、おそらく金持ちで財産をそれなりに持っていると思われるおじからもヨットを相続しており、大きな括りで言えばビートでなく体制側に安住した人間のうちの1人ということになるだろう。一方で、彼は、「そばにいと決して退屈」させず「女の扱い」がうまく、真面目というよりも、奔放で規範にとらわれない、広い意味で「ビートの」な性格の人物でもある。

そして、作中の語り手は、そのような実在のハリー・オリフをモデルにしたと思われる人物に、どう関わっているだろうか。死を悼み同情しながら、ハリーが社会の体制側にいたがゆえに得たと思われる富の1部をちゃっかりおこぼれとしてもらってしまう。また、同時に、「ハリーであつたらそうすることを望んでいたと思われるように (“the way Harry would have wanted”）」(Fires 163) 社会生活から解放されたかのようなメキシコへの放浪の旅を、ハリーの人

生を乗っ取るようにして楽しんでしまう。

「放浪の旅」というとビートの旅を連想させる。ジャック・ケルアック (Jack Kerouak) の『路上 (On the Road)』の主人公たちが最後に向かったのもメキシコだった。伝記上ケルアックも、麻薬と売春婦を求め、かつ、「コロンブス到来以前のアメリカの大地がどんなものであったか、そして本来はどうあるべきかをメキシコを通じて想像する北米人」の一人として、7度メキシコを訪れている (ビュアン 199)。また、『路上』でディーン・モリアーティ (Dean Moriarty) は、安上がりで素早く離婚できることをメキシコへ向かう目的の一つとして挙げているが (Kerouac 238)、モリアーティのモデルとなり、ケルアックをメキシコに連れて行ったことのあるニール・キャサディ (Neal Cassady) もメキシコで離婚の法的手続きを行っており (Charters 120)、そしてハリー・オリフもエイミーによればメキシコへ行って彼女と結婚する約束をしたことがあり (“The Beatnik Cop’s Other Blonde Talks” 4)、「エイミーがメキシコでの離婚を迫った時彼女をたたいたことが一度ある (“[Olliffe] had beaten her once when she pressed him about getting a Mexican divorce”)」(1) とのことである。さらに、カーヴァーの「ハリーの死」の語り手は語っている現在の時点でメキシコのマサトラン (Mazatlan) にいる設定となっているが、マサトランは、誤って妻を撃ち殺してしまい保釈出所中であったウィリアム・バロウズ (William Burroughs) のもとを訪れようとケルアックが 1952 年にメキシコシティへ向かう途中、メキシコ人の知り合いに連れられ立ち寄り、麻薬を大量に摂取し海岸に寝転がって「神秘的な一夜を体験した」場所であり (ビュアン 201-203)、「メキシコが放蕩な娯楽と自己発見の目的地であるという概念を強めるのにビート族が使った多くの場所のうちの一つ (“one of the many places that the Beats used to bolster the idea of Mexico as the destination for debauched recreation and self-discovery”)」(Cave) である。メキシコという設定は「ビート」をどこことなくおわせている。

しかし、ビート族の旅が、既成の社会体制や西洋中心の文明そのものへの反発とそこから離脱を目的としていたと思われるのに対し、「ハリーの死」の語り手の旅は、社会体制側の利益にすぎただけの、ただのビート族っぽい旅であるにすぎない。

カーヴァーに関心があったのは、ハリー・オリフよりもむしろ、オリフの周辺にいたかもしれない、そんな語り手のようなタイプの人物であったことだろ

う。つまり、作中でハリーから、ヨットをもらった語り手のように、違法行為を取り締まるという体制側にいたオリフの仕事に倫理的に深く同調するだけの正義感も持たずに、彼が社会で得た利益にだけはすがってちゃっかりおこぼれをもらうような、こだわりのない一般人である。かつその人物は、奔放なハリーがしていたはずの旅を乗っ取り、日常の社会生活から解放されたかのような奔放なハリーの生活スタイルを模倣した語り手のように、社会や文明に反発する思想なしで、社会規範にあきらかにそぐわない行動を示威的に堂々と取る大胆さもなく、オリフのビート族的側面を上っ面だけ模倣するであろうこだわりのない一般人でもある。

ここで、社会問題を論じるどころかそれに言及するキーワードすら直接にはなかなか使わないカーヴァーにしては稀有な、「ビート族 (“beatniks”）」というフレーズが出てくる、「サンフランシスコで何をするの? (“What Do You Do in San Francisco?”)」(『お願いだから静かにしてくれないか? (*Will You Please Be Quiet, Please?*)』所収) という短編にふれなければならない。郵便配達人で国家公務員である語り手からみると、男はとがった顎髭を生やし確実に仕事をしておらず2人ともビート族に見え (*Will You Please* 111), 男は前科者で、女は麻薬中毒者との良からぬうわさがある (116)。郵便配達という仕事をしてそれなりに真面目に生活している語り手は、この2人の生き方に疑問を感じえず、配達したついでに女に逃げられたと思われる男に、「働いて彼女のことは忘れてしまったらどうだい。仕事にどんな反感があるんだね? 君と同じような状況にあった時その問題を忘れさせてくれたのは一日の仕事だった。それから、戦争もあってそこで私は…… (“Why don't you go to work and forget her? What have you got against work? It was work, day and night, work that gave me oblivion when I was in your shoes and there was a war on where I was..”）」とつい説教をしてしまうが、もちろん、男には響かずまもなく彼はどこかへ引っ越してしまう (120)。語り手の社会における立ち位置は、やや年配で落ち着き達観している感はあるが、「ハリーの死」の語り手の立ち位置につながる。「サンフランシスコで何をするの?」の語り手はこう語る。「私は不真面目なだけの人間でも、あるいは自分で思うには真面目なだけの人間でもない。今日、人は真面目さと不真面目さの両方の側面を少しずつ持たざるを得ないのだ (“I'm not a frivolous man, nor am I, in my opinion, a serious man. It's my belief a man has to be a little of both these

days.”)」(111)。

体制側にも、そこに反発したりそこから脱却したりする側にも、入れ込むことなく、どちらかと言えば体制側であるが、こぼれ落ちそうになりながらもそこにすがりついている、という人間像である。どちらにも入れ込まない思想的なこだわりの無さが、「サンフランシスコで何をするの？」の語り手に、社会の矛盾を深く考えずほどほど「真面目に」仕事をさせ、もう少し若いと思われる「ハリーの死」の語り手に仕事をしながら (*Fires* 163)、ほどほど「不真面目な」旅をさせる。そして、この人間像は、以前拙論で論じた、いぶしつぽによる環境問題に「何も言わず」、それが守るりんご生産に依拠して社会にすがって生きるヤキマの人々と (108)、カーヴァーが描いた中心的な人物たちとも共通する。

8. ブレイン

1961年6月、当初の計画通りカーヴァー一家はメアリアンも子供のころに暮らしたことのあるカナダとの国境近くにあるワシントン州ブレイン (Blaine) という町のパーク通り (Burk Road) という道沿いにある農村へやってくる。メアリアンは現在旧姓を真ん中に入れてメアリアン・パーク・カーヴァー (Maryann Burk Carver) と名乗っているが、この通りの名前は、1880年代にドイツから開拓しにやって来た彼女の祖父にちなんでつけられたそうである (M. Carver 153)。カーヴァーはこの農村での生活を題材にして「これはどう? (“How about This?”)」(『お願いだから静かにしてくれないか』所収) という短編を書いている。短編の主人公はサンフランシスコ、ロサンゼルス、シカゴ、ニューヨークという都会にこれまで住み、初めての長編小説を書いている作家でありながら、同時に俳優でもあり、音楽家でもあって、より簡素な生活の中で人生をやり直すために妻の父親の農村へやってくるという設定である。カーヴァーより住む町の規模も大きく、複数の夢を同時に追いかける堅実さも彼より欠けているとあってよく、都会で夢を追いかける浮ついた生活と田舎での地味で地道な生活とが、くっきりとしたコントラストをなす効果を狙った人物設定である。したがってカーヴァーと全く同じ状況ではないが、冒頭で描写される主人公の心情はカーヴァーが初めてこの農村へやってきた時のものにかなり近いだろう。

All the optimism that had colored his flight from the city was gone now, had vanished the evening of the first day, as they drove north through the dark stands of redwood. Now, the rolling pasture land, the cows, the isolated farmhouses of western Washington seemed to hold out nothing for him, nothing he really wanted. He had expected something different. He drove on and on with a rising sense of hopelessness and outrage. (町からの逃避を実際以上によく思わせていたあらゆる希望的観測は、今ではなくなっていた。それは、どんよりと立ち並ぶアメリカ杉を通り抜けて車で北へ向かっている、1日目の夕方に消え去っていた。今では、ワシントン州西部の、緩やかに起伏する牧草地、牛、ぼつんと点在する農家が見えているが、それらは彼には何もしめていなかった。彼が本当に望むものは何も。彼は違ったことを期待していた。運転して先に進むにつれ、彼の絶望観と怒りは募っていった。) (*Will You Please* 185)

とにかく何もないところなのだとしたことだけでも確認しようと思い、この場所へ行ったが、パーク通りに近づくにつれ、確かに農村以外何もなくなる。ただし主人公の心情と決定的に違うのは、失望と退屈さではなく、何とも言えない緊張感に襲われたという点だ。先ほども述べたようにパーク通りのすぐ近くにはカナダとの国境があり、分かりにくい国境パトロールの車が時折国境近辺を見回っている。



図版3 パーク通り近くのカナダとの国境⁽¹⁾

フェンスや有刺鉄線で厳重に仕切られているメキシコとの国境沿いとは異なり、経済格差もそれほどなく不法入国者もそれほど多くない歴史的な状況を窺わせるかのように、写真(図版3)中、手前のアメリカ側の細い通りと向こうのカナダ側のゼロ通り(0 Avenue)という通りの間が電柱と電線のようなもので仕切られているだけで、簡単にまたいで向こう側に越境できてしまいそうであるが、壁などがない分パトロールでしっかり見張っているようである。国境といい、近くの農村(図版4)といい、写真だけ見るとただのどかな農村であるが、背後ではしっかり政治がうごめいていた。



図版4 パーク通り周辺の農村

9. アーケイタ

「これはどう？」の主人公のように、カーヴァーが田舎での生活の退屈さにうんざりしたことももちろん原因であろうが、メアリアンによれば、彼女の実家で父親と同居することに居心地の悪さを感じ創作意欲を掻き立てられなかったことも原因となり(M. Carver 154)、1961年の8月中旬には(344)、フンボルト州立大学(Humboldt State University)に近いアーケイタのI通り1590番地(1590 I Street, Arcata)の家へ引っ越してくる(155)。

ドールハウスのようなヴィクトリア朝様式の造りで、ベッドルームが4部屋と書斎まであり、庭に花が咲き乱れるその家を、メアリアンはそれまで住んだ中で断トツに最高の家であると言っておりかなり気に入っていたようである(155)。カーヴァーが住んだ60年代初期でもすでに「古い家」とメアリアンは



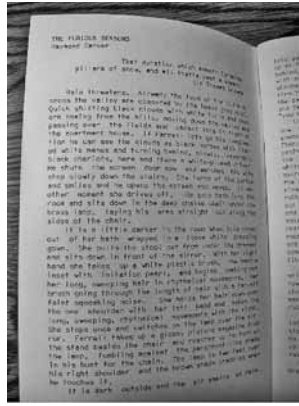
図版5 アーケイタ, I通り1590番地付近

言っているが (154), アーケイタの歴史的建築物の特定と保存を目的として設立されたアーケイタ史跡協会 (Historical Sites Society of Arcata) のホームページによると, アーケイタでは 1885 年から 1900 年ころにヴィクトリア朝様式の家屋が建設され (“Historic Arcata”), この様式の家は現在でも残っており町のあちらこちらで見られ, この住所の近所 I 通り 1566 番地 (1566 I Street) にある青いヴィクトリア朝様式の家は, 1894 年築とのことである (“Architectural Tours — Touring North Arcata”). このことは, 全国的な戦後の都市開発計画の波にも吞まれず歴史的建造物を大事に保存してきたことを表していると言えるが, 一方では, 同じくヴィクトリア朝建築が多く残されているユリーカ同様, カリフォルニアの北端近くに位置し発展からやや取り残されてきた町の状況を表しているとも言えるだろう。「サンフランシスコで何をやるの?」で, おそらくビート族と思われるカップルにやや当惑し冷ややかな視線を投げかける語り手たちが住んでいたのはこのアーケイタである。

カーヴァーの短編や詩が雑誌に掲載され始めたのは彼がフンボルト州立大に在学中のことである。まず彼がチコ州立大時代に創刊した『セレクション (Selection)』の第 2 号である 1960-61 年冬号 (図版 6・7) には短編「怒りの季節 (“Furious Seasons”)」が掲載され, フンボルト州立大の文芸誌『トイアン (Toyon)』の 1961 年春号 (図版 8・9) には短編「父親 (“The Father”)」が, そして, 今度は彼が編集にも携わった同じ『トイアン』の 1963 年春号



図版 6 表紙



図版 7 「怒りの季節」1 ページ目

図版 6・7 『セレクション』第 2 号 (カリフォルニア州立大学チコ校図書館所蔵)

出典 : Gary Todd, ed, *Selection 2* (1961).



図版 8 表紙



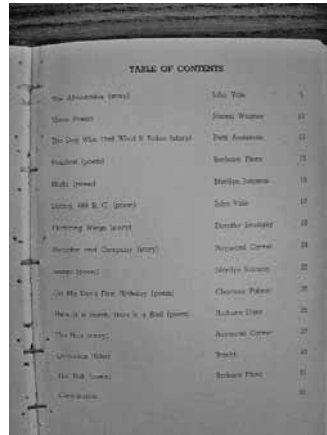
図版 9 「父親」1 ページ目

図版 8・9 『トイアン』1961 年春号 (フンボルト州立大学図書館所蔵)

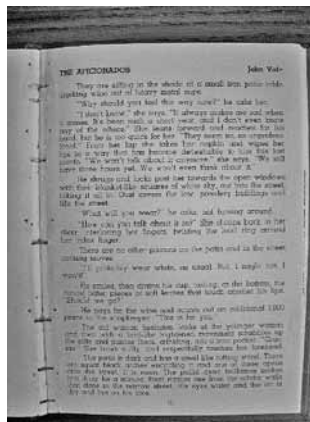
出典 : Ken Gattlin, ed, *Toyon, Spring* (1961).



図版 10 表紙



図版 11 目次



図版 12 「熱愛者たち」1 ページ目

図版 10~12 『トイアン』1963 年春号 (フンボルト州立大学図書館所蔵)

出典: Raymond Carver, ed, *Toyon*, Spring (1963).

(図版 10・11) にはジョン・ヴェイル (John Vale) というペンネームで短編「熱愛者たち (“The Aficionados”)」と詩「紀元前 480 年春 (“Spring, 480 B.C.”)」が、カーヴァーの名で短編「髪の毛 (“The Hair”)」と「ポセイドン

と仲間たち (“Poseidon and Company”)」が、それぞれ掲載されている。

その後学外誌への投稿が採用され、アリゾナの雑誌『ターゲッツ (*Targets*)』の1962年9月号に詩「真鍮のリング (“The Brass Ring”)」が、1963年ユタの雑誌『ウェスタンヒューマニティーズレビュー (*Western Humanities Review*)』冬号に短編「パストラル (“Pastoral”)」が掲載される。カーヴァーの初の活字化された短編は「怒りの季節」ということになるだろうが、彼自身はインタビューで、初出版された短編は「パストラル」であると答えている (Gentry and Stull 36)。「真鍮のリング」と「パストラル」の掲載の知らせを同時期に受け取った時、アーケイタの家へ祝いに来る人が絶えず、普通の生活に戻るのに3日かかったそうで、非常に記念すべき印象的な出来事となったようだ (M. Carver 162)。「パストラル」以前に出版された短編5編は、そのため忘れられてしまったのか、自らも編集に携わる学内誌での掲載ということでも数に入れていなかったのか、あるいは、内容的に初めての短編としてふさわしいと彼自身が認めるものではなかったのだろうか。たしかにこれら3編はいずれもその後のカーヴァーの作風から外れる実験的なものである。

創作クラス以外にはあまり興味を感じていなかったカーヴァーであるが、卒業に必要な単位を取るため1962年の夏には科学や体育の授業を夏期講習として追加で受け (163)、それでも、転入後2年半かかって1963年1月に何とかフンボルト州立大で学位を取得する (166)。卒業後カーヴァーはカリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkeley) の図書館で働くため単身バークレーへ赴く (166)。大学ではマリオ・サヴィオ (Mario Savio) の演説が何百人も何千人もの聴衆を動員し⁽²⁾、街では黒人の公民権を過激に訴えるブラック・ムスリム (Black Muslims) がマルコム X (Malcom X) や彼らの指導者イライジャ・ムハンマド (Elijah Muhammad) について語っていた、とメアリアンは回想する (166-67)。自由かつラディカルな活気あふれる雰囲気を経験し、このころ友人に誘われマリファナの体験もしたようだ (167)。半年ほど経った63年の夏、進路に迷っていたカーヴァーはディック・デイ (Dick Day) の勧めと大学への推薦のおかげで、大学院プログラムである高名なアイオワライターズワークショップへの入学と1,000ドルの奨学金授与が決まり、家族とともにアイオワへ向かう (167)⁽³⁾。

しかしアイオワは、もっぱらトウモロコシ畑と養豚場ばかりで、冬は路面が凍り付いてしまうほど寒く、二人にとってはバークレーのような活気からは程

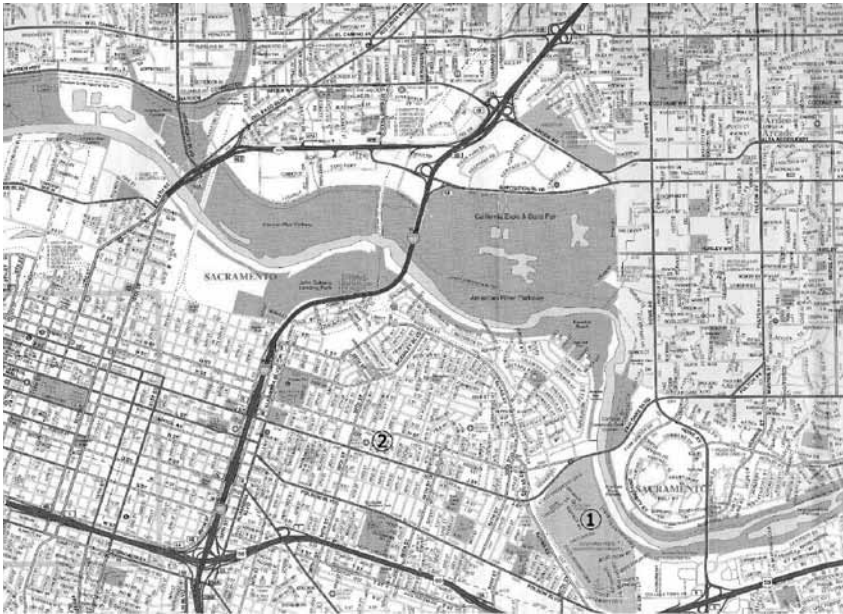
遠い退屈な辛い土地であったようだ (168-69)。追い打ちをかけるように、63年11月には彼らの支持していたケネディー大統領が射殺されるが、メアリアンは、当時働いていたレストランで、金持ちたちが新しい時代の幕開けに乾杯する様子を見て保守的なアイオワの雰囲気をなげいたという (173)。カーヴァーは授業に興味を持てず、むしろ自宅での創作活動に打ち込んでいたようで、「お願いだから静かにしてくれないか?」、「60 エーカー (“Sixty Acres”)」、「学生の妻 (“The Student’s Wife”)」など、後に日の目を見るいくつかの短編を書いている (182)。1年の文学修士号プログラム (MA)、創作論文の提出を要する2年の創作学修士号プログラム (MFA)、そして博士号プログラム (PhD) と三種類の選択肢があったが (Sklenicka 88)、彼は入学して早々の63年10月には、文学修士号だけ取って1年で出ることを決め (91)、さらに結局それを取るのに必要な30単位に届かない12単位しか取れず、学位取得を放棄してカリフォルニアへ戻ることとなる (105)。

10. サクラメント

カーヴァー一家は1964年6月に車での長旅の末一家でカリフォルニア州サクラメント (Sacramento) にやって来て (Sklenicka 109)、それから、67年6月までの約3年間をそこで暮らしている (122)。ここでは、彼らが暮らした場所を中心にサクラメントでカーヴァーと関係のある場所を地図と写真で確認し、この町を舞台にしていると思われる短編「ささやかながら助けになること (“A Small, Good Thing”)」について考察してみる。

カーヴァーが暮らしたサクラメント

図版13の地図中左下に州庁舎のあるサクラメントのダウンタウン地区 (Downtown Sacramento) があり、地図の左右を横断するアメリカン川 (American River) をはさんで、地図の右上、市の北東方面の郊外に、アーデンアーケード (Arden-Arcade) という市には編入されていない地域があり、カーヴァーはその地域に主に住んでいた。アーデンアーケードの地域を拡大したのが図版18である。



図版 13 サクラメント市の地図 (丸数字①と②は筆者によるもの)

出典：Sacramento. map (BC: GM Johnson and Assoc., 2016; print).

図版 13-① カリフォルニア州立大学サクラメント校 (California State University, Sacramento [旧 Sacramento State College])

カーヴァーは1966年の秋に、サクラメント州立大学 (Sacramento State College) で詩人デニス・シュミッツ (Dennis Schmitz) の担当する詩の創作ワークショップに聴講生として参加した (Sklenicka 122)。他の学生たちがエスニック風、カウンターカルチャー風の服や、仕事着とジーンズなどの個人的な服装をしていた中で、彼だけはデパートチェーン店の JC ペニー (J. C. Penny) で買ったような没個性的な服を着ていたという (124)。彼はこの大学のイングリッシュクラブ (English Club) から1968年に初の単行本となる詩集『クラマス川近くで (Near Klamath)』(図版 16) を出版している。

図版 13-② マーシー病院 (Mercy Hospital)

カーヴァーはここで清掃を主な仕事とする用務員 (janitor) として働いて

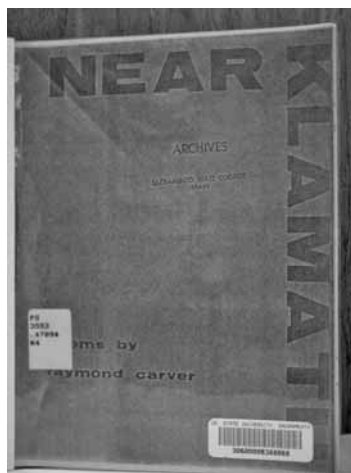


図版 14 正門



図版 15 英文学科のあるカラヴェラスホール (Calaveras Hall)

図版 14・15 カリフォルニア州立大学サクラメント校



図版 16 詩集『クラマス川近くで』表紙 (カリフォルニア州立大学サクラメント校図書館所蔵)

出典：Raymond Carver, *Near Klamath* (Sacramento, CA: English Club of Sacramento State College, 1968).

おり、はじめは昼間のシフトであったが、やがて夜間のシフトに切り替え、昼間は創作に没頭したという (Sklenicka 114-15)。短編「ささやかながら助けになること」で、子供が交通事故で運ばれた病院の描写は、この時の経験が影響しているだろう。



図版 17 マーシー病院

図版 18-① パークシャー通り 2845 番地 (2845 Berkshire Way)⁽⁴⁾

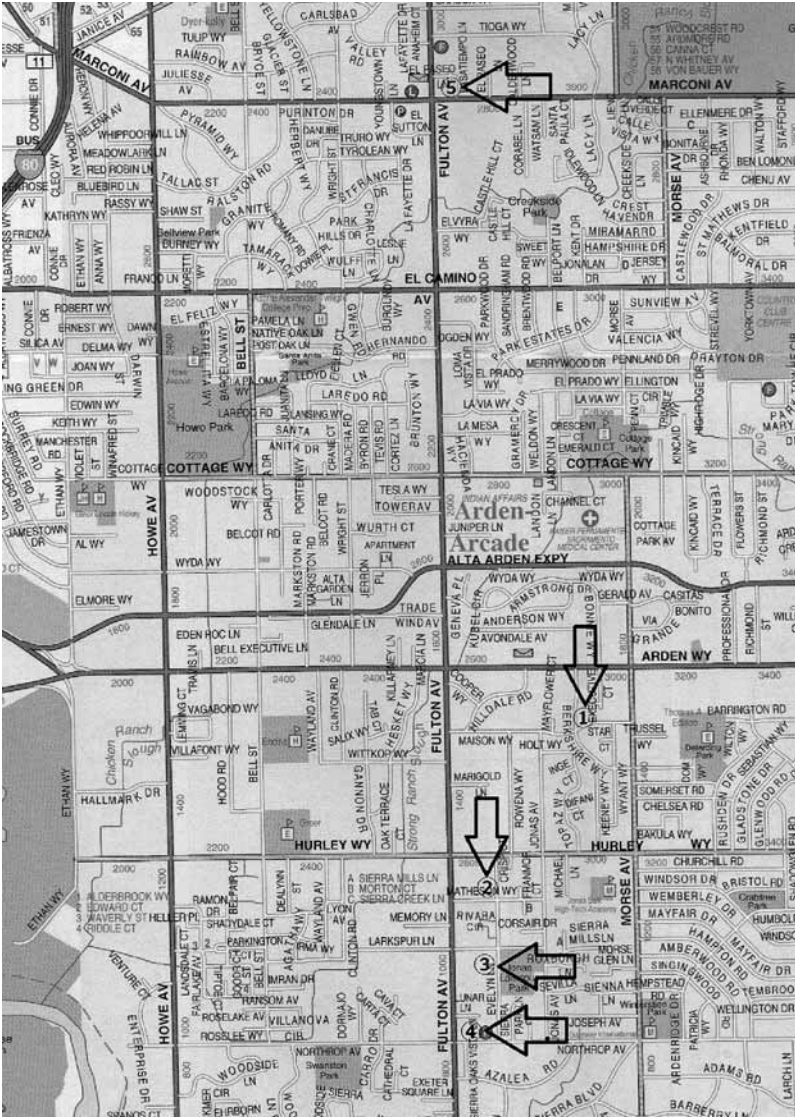
64年7月ころ (M. Carver 189) から65年1月ころ (201-202) まで借りた一軒家があった場所。4ベッドルームで (Sklenicka 110), 賃料はメアリアン曰く「びっくりするほど高かった (“shockingly expensive”）」という (M. Carver 189)。

図版 18-② マシソン通り 2641 番地 (2641 Mathethon Way)

65年1月ころから、同年のクリスマスのころ (Sklenicka 119) まで借りた一軒家があった場所。1ベッドルームの小さな家だったとのこと (113)。

図版 18-③ ラークスパー通り 2642 番地 (2642 Larkspur Lane) の家

65年のクリスマスのころから、67年の4月ころ (M. Carver 206-207) まで借りた一軒家があった場所。短編「頼むから静かにしてくれないか？」が『ディセンバー (December)』誌に受け入れられ、この広い、賃料の高い家に引っ越してその採用を祝った (Sklenicka 119)。メアリアンは当時ペアレントマガジナルチュラルインスティテュート (Parents' Magazine Cultural Institute) という出版社で教育用百科事典の戸別訪問販売をしていたが物売



図版 18 アーデンアーケードの地図 (丸数字①～⑤と矢印は筆者によるもの)

出典 : *Sacramento. map* (BC: GM Johnson and Assoc., 2016; print).



図版 19 バークシャー通り 2845 番地付近



図版 20 マシソン通り 2641 番地付近

りの才能を買われ出世し稼ぎがよかったため (Sklenicka 115; M. Carver 203), 250 ドルの賃料のほとんどは彼女が払っていた (Sklenicka 119)。彼らはポンティアック・カタリナ社製のオープンカーを買い (118)⁽⁵⁾, 家政婦も雇った (M. Carver 203)。売るものは百科事典ではなくビタミン剤であるが、戸別訪



図版 21 ラークスパー通り 2642 番地付近

問販売で成績のよい妻と病院で働く夫という設定は、「ビタミン (“Vitamins”）」(『大聖堂 (*Cathedral*)』所収) で使われている。

図版 18-④ ディアブロリヴィエラ (*Diablo Riviera*) アパート

67年の4月ころから、同年7月ころまで (Sklenicka 137), 管理人として暮らしていた、ルナー通り (Lunar Lane) 沿いにあるアパート (Sklenicka 131)。2013年時点で現存する。彼らは家賃なしでそこに住み、さらに月に100ドルを受け取っていた (131)。大きなラークスパー通りの家からこちらに移動しなくてはならなかったのは、経済的な理由からであるが、メリアンによれば、仕事に専念する彼女に対するカーヴァーの不満が影響し業績が下がって、一家は金銭的苦境に陥ったという (M. Carver 206)。67年の4月14日にカーヴァー家は破産を申請している (Sklenicka 130)。金回りのよいときに買ったオープンカーは破産を申請する前に急いで売るため、4月11日には『サクラメントビー (*Sacramento Bee*)』誌に図版 23 のような広告が出された⁽⁶⁾。車種から記載する他の広告と比べ、「母親が車を売らなくてはなりません。“MOTHER Must Sell Her Car.”」という売り込み上手なメリアンらしい人目を引く書き出しである。「あずまや (“Gazebo”）」(『愛について語る時我々の語ること』所収) や「馬勒 (“The Bridle”）」(『大聖堂』所収) のように、



図版 22 ディアブロリヴィエラアパート

<p>50 OLDS Sta. Wagon. Sacrifice \$150 Djr. 927-8581.</p> <p>SUTTON MOTOR SALES 2211 Fulton Avenue. LV 3-1307</p> <p>42 OLDS 88 2 Dr. HT. Factory Air. nice, \$1,599. Winter Motor Co. Inc. 29th & Broadway; 437-0715.</p> <p>45 F-85 CUTLASS Convert. V8, PS, auto. trans., buckets, console, excel., sharp. \$1,750. 487-8884.</p> <p>64 OLDS. Cutlass HT. FOC. Air. ps. pb. 4 spd. \$4,600. Air. Exl. cond. 1st \$1,600. 922-7758.</p> <p>FOULK'S OLDSMOBILE Open Fives, Closed Sundays 1700 K St. GI 2-2951</p> <p>44 OLDS Jet Star 2 Dr. Htdp. R&H, auto., ps. pb. loads of other extras. This immac. low mileage sweet heart is like brand new. \$48.31 dn. & assume the bal. of ovrmt of only \$48.31 per mo. CALL MR. HARVEY, TRANSFER MGR., 331-4507 for instant transfer-approval by phone. 5650 Auburn Blvd., dir.</p> <p>63 Oldsmobile Starfire Coupe Smart Provincial white hardtop coupe with spotless rose vinyl interior. Equipment includes factory air conditioning, power windows, power seat, tinted glass, white wall tires, etc. (ANY558).</p> <p>\$7,100</p>	<p>44 PONT. Sta. Wagon. 4 Pass. Foc. Air. Lug. Rack. Pwr. Seal. PS, PB. Auto. Trans., Good cond. 428-4345.</p> <p>61 PONT SP Cpe. PB, P3, R&H, mist green. \$795 or highest bid. Household Finance Corp. 3043 El Camino. 487-8660.</p> <p>42 PONT. Cat. safari Sta. Wagon. Full power, fact. air cond. Very clean, \$1,199. Ed. Jakelch Motors. 1521 K St. 447-6741.</p> <p>MOTHER Meet Sell Her Car. 2nd owner. 62 Pont. Catalina Convert. Exl. cond., ps. pb. rh, new auto. trans. Premium wv. tires. Well cared for. \$875. 481-0368, aft. 7.</p> <p>42 PONTIAC Catalina Station Wagon. radio, heater, automatic, power steering. Like new inside & out. \$10 down, \$36 month. 3301 Fulton Ave., dir. 483-7865.</p> <p>66 PONT. GTO 2 Dr. Sport Coupe. r&h, ps. pb. auto., console, red w/black leather bucket seats. 10,000 miles of factory service warranty left. Only \$26.74 dn. & assume the balance of payments of only \$36.74 per mo. CALL MR. HARVEY, TRANSFER MGR., 331-4507 for instant transfer approval. 5650 Auburn Blvd., dir.</p> <p>60 PONT 4 Dr., HT. Full Power, incl. fact. air cond. Cd. working man's car at low price \$499. \$24 down & \$28 mo. dir. 7336 Fair Oaks Blvd. Carmichael. 481-2444.</p> <p>65 Pontiac Bonne. 2 Dr., HT. factory air cond., V8.</p>	<p>61 RAMBLER American 4 Dr. RM., 3 speed. \$499. Winter Motor Co. Inc., 29th & Broadway; 437-0715.</p> <p>44 RAMBLER American, Radio, Heater. Good shape inside & out. \$10 down, \$44 month. 3301 Fulton Ave., dir. 487-7118.</p> <p>61 RAMBLER AMERICAN 2 Dr. Sedan. Radio, heater. Only \$10 down. \$21 month. 2538 Auburn Blvd. at Fulton, dir., 483-4675.</p> <p>42 RAMBLER Sedan. Extra Clean. New tires. No down required.</p> <p>TAKE OVER PAYMENTS \$22.66 per mo. Credit ok'd by phone. Air. Date, WA 5-1582.</p> <p>SCOUT</p> <p>42 INTERNATIONAL Scout 4 Wheel drive, \$1,299. Has 6 cyl. Chev. motor, full top, hubs, rubber new. Winter Motor Co. Inc., 29th & Broadway. 457-0715.</p> <p>4 WHEEL DR. SCOUT Exceptional features, postraction on all 4 wh. 4 free lock hubs, heavy duty differential. 5 new all weather tires. \$1,450. 482-9165.</p> <p>STUDEBAKER</p> <p>55 STUDEBAKER Good For Hot Rod or trans. car. 988-3380.</p> <p>62 STUDE. Lark "4" Sta. Wagon. 3125, 2444 Kingsington St.</p> <p>43 STUDE. 4 Stand. 4 Dr. \$450 Or make offer. 967-7080.</p> <p>59 STUDE. Lark. Recently Tuned. New clutch, excel. tires, etc. \$225. 456-0862.</p> <p>62 STUDE Wagon V-8 Auto. Exempt. Cond. \$399. MILLIKEN MOTORS.</p>
---	---	--

図版 23 車を売り出したときの広告 (囲み線と矢印は筆者によるもの)

出典：Sacramento Bee (11 April 1967, print).

人物たちがアパートの管理人をする短編はこの時の経験がもとになっていると思われる。

図版 18-⑤ タウンアンドカントリーヴィレッジ (Town & Country Village) ショッピングセンター

アーデンアーケードの地域でも北の方にあるショッピングセンター。2012年までここに「アルドー (Aldo's)」という高級レストランがあった (Burns 119)。『頼むから静かにしてくれ』所収の「合図 (“Signals”)」で、夫婦は「北の方にだいたい離れたところにある新しくできた優雅なレストラン、アルドー (“Aldo's, an elegant new restaurant north a good distance”)」に妻の誕生日を祝うため、そして夫婦仲を立て直そうとやってくる (*Will You Please* 219)。メアリアンはかつて同じオーナーが経営するアルドーの前身となるパインコーン (Pine Cone) とフランベルーム (Flambé Room) というレストランで働いていたようで (M. Carver 190-92)、カーヴァー夫妻も、メアリアンが仕事を辞めた後に開店したアルドーで食事をしたかもしれない。また、タウンアンドカントリーヴィレッジは、1945年にできたが、赤い瓦の屋根に傾斜したひさしで覆われた平屋の建物で統一されたショッピングセンターである (“Town & Country Shop Center Is Near Completion”)⁽⁷⁾。ある種テーマパーク的な造りのショッピングセンターであるが、この地域近辺にはアーデンフェア (Arden Fair) やカントリークラブプラザ (Country Club Plaza) など大型のショッピングセンターがいくつかあり、その先駆けとなったような施設だ。短編「合図」では、夫婦は仲を立て直すどころか、ぎくしゃくした日常の関係をレストランに持ちこむような会話をするだけであり、夫が妻にウェイターやしまいにはオーナーのアルドーについての愚痴をこぼす始末となる。図版 25 のチラシに書かれてるように「ロマンティックなカリフォルニアの輝ける過去の 1 ページ (“a page from Romantic California's Golden Past”)」を再現したようなショッピングセンターの豪華レストランで繰り広げられるカーヴァーワールドは、惨憺たるものである。

「サクラメント」の物語、“A Small, Good Thing”

カーヴァーの短編の中でも傑作のうちの 1 つとされることの多い『大聖堂 (Cathedral)』(1983) 所収の「ささやかながら助けになること (“A Small, Good Thing”)」は、サクラメントで暮らしていたころの出来事に基づいて書かれた話とされている。「ささやかながら助けになること」とその短い版である『愛について語る時我々の語ること (*What We Talk about When We Talk*

about Love)』(1981) 所収の「風呂 (“The Bath”)」の中で起こる子供の交通事故について、カーヴァーの娘クリスティ (Christi) は、 sacrament に住んでいた時に彼女が自転車にのっていて車に引かれたエピソードに基づいている、とあるインタビューで回想している (Halpert 79)^⑧。クリスティは、犬を捨てに行く父親の話「ジェリーとモリーとサム (“Jerry and Molly and Sam”)」が、カーヴァーが当時飼っていた白い犬に手を焼いていたエピソードに基づいて書かれたことに言及し、その犬を飼いカーヴァーが病院で用務員として働いていたころ住んでいた家について回想する流れで、交通事故のエピソードに触れている。犬は「ささやかながら助けになること」の一家も飼っている。また、メリアンによれば、カーヴァーがマーシー病院 (Mercy Hospital) で働いていたのは、マシソン通りの家に住んでいた時とのことであるから (202)、上の図版 20 付近にあった家に住んでいた時の経験がもとになって、「ささやかながら助けになること」も書かれたと考えられる^⑨。短期間で複数の家を転々としているため、記憶にふれがある可能性はあるが、家族で一軒家に住んでいたころであれば、図版 19, 20, 21 のどこかで、いずれにせよ sacrament 郊外アーデンアーケード地区の似通った景色に囲まれた住宅街であり、そこが「ささやかながら助けになること」の舞台になったと考えられる。

「ささやかながら助けになること」の前半部は、その短い版である「風呂」とほぼ同じプロットを持つ。スコッティー (Scotty) という少年が誕生日に交通事故で病院に運び込まれ昏睡状態に陥り、その両親が看護をしながらも長期戦にそなえ 1 人ずつ自宅へ帰り少しだけでも休息をとることにする。妻のアン (Ann) が家へ帰ったとき突然電話がかかり、名前を名乗らぬ電話の主が「スコッティーに関係のあることだよ。 (“It has to do with Scotty...”)」(*What We Talk About* 56; *Cathedral* 75) と言う。「風呂」のストーリーは、息子のその後の安否も電話の主の正体もはっきりと示されず、両親も読者も宙吊りにされたまま突然そこで終わってしまう。「ささやかながら助けになること」ではそこからさらに新しいストーリーが展開する。自宅から病院に戻ったアンと夫の必死の願いもむなしくスコッティーは死んでしまい、二人が帰宅した後、アンがいたずら電話の主がスコッティーの誕生日ケーキを頼んでいたパン屋であることに気付き、パン屋へと怒りをぶちまけに行くが、スコッティーが死んだことを知ったパン屋は心から謝りふたりにパンを食べさせ、パンだけを焼き続けてきた彼の孤独な人生について夜が明けるまで語りつづける、とい

うところで「ささやかながら助けになること」のストーリーは終わる。

「風呂」に比べると「ささやかながら助けになること」では登場人物同士の絆やコミュニケーションを描くことにあきらかに力点が移動し、絶望よりも再生をテーマとしている点において作家の姿勢がずっとポジティブになっている、といった趣旨のことが批評家たちによく指摘される。たしかに最後の場面で3人がパンを食べながら語るシーンではそれまでの絶望的な雰囲気をも払拭してしまうほどの何か決定的、本質的な救いが提示されているようにすら感じられる。しかし、この「パン」という救いは夫婦にとってタイトルが示すように「ささやか」なものであるにすぎず、ここで彼らがパン屋と和解しなぐさめられ空腹を満たしたとしても、息子が死んでしまったという厳しすぎる現実にもたすぐに戻っていかなくてはならず、このパン屋での出来事は慰め程度のつかの間の休息にすぎないとも考えられる。「風呂」でタイトルになっている入浴も安らぎを与える一種の救いである。しかし、アンの夫は一時帰宅して風呂に入っている最中に電話が鳴って風呂から出ることになり (*What We Talk About* 50), アンにいたっては帰宅してから風呂に入る前に電話がきて物語が終了してしまうため、はじめから風呂に入ることすら許されない。言ってみれば、それは不条理な現実の力によって不意に損なわれてしまうもろい救いである。それに対し「パン」は一見、不幸に打ちひしがれた夫婦を絶望の底から救い出す絶大な力を持った救世主のように見えるが、しかし先程も述べたように、よく考えてみれば、それは「ささやか」なものにすぎず、あたかも「絶大なもの」にみせているのは、夫婦が看病でろくに食べ物もとらず空腹であったこと、そして悪人だと決め付けていたパン屋が意外にも彼らの人生に共感を示してくれたこと、といったその場の状況、意地悪な言い方をすれば、いきおいのなせる業であり、「パン」も「風呂」も、そして、「パンの物語」も「風呂の物語」も実質的にはさほど変わらない、と言えないか。

パン屋と仲直りし、パンを食べるといふようなことがこの時代の人々に残された救いであり、そのようなささやかなことで人は意外と生き続けられるものだ、とまとめることはできるし、たしかにこの最後のパンを食べるエピソードは物語の結末としては、やはり救いとして提示されているとどうしても読みたくさせられる地位を展開の中において与えられている。しかし、それにしても、例えば、車で轢いた犯人が謝罪に来たというわけでもなく、親しい親戚にひたすら慰めてもらったというわけでもなく、はたまた、医者が診断ミスをしたこ

とを夫婦に謝罪するというわけでもなく、ワイス夫妻に間違っただけの嫌がらせの電話をしてしまっただけの、夫婦に不幸をもたらした主な原因から外れる人物から謝罪してもらってパンをもらったということが、なぜ「救い」になるのだろうか。そもそも息子が死んだ大変な時にそんないたずら電話にむきになって不幸のすべての原因であるかのように、なぜパン屋と即対峙しなくてはならないのか。そして、なぜ最後に「救い」になりうるのか、日常的・常識的感覚ではどうしても（少なくとも個人的には）違和感がぬぐえない。テーマティックに日常的・常識的倫理基準からのみ判断するところから一步離れて、宗教的、歴史的、政治的な枠組みから眺めた時、この違和感を解消しうるものがないかを探ってみる。

救いと言えば、宗教そしてキリスト教がまず思い浮かぶが、カーヴァー研究の第1人者である、ウィリアム・L・スタル (William L. Stull) は、「ささやかながらも助けになること」を「風呂」と比較しながら考察した論文において、作中で発生する出来事にとどまらず、それらの出来事をキリスト教的象徴として読み込み、人物たちの行為、言葉、そして人生がいかに関与しているかを指摘している。スタルは2つの短編のタイトルにもなっている、「風呂」と「ささやかながらも助けになること」つまりパンを、それぞれ「秘跡 (“sacrament”）」における、「洗礼 (“baptism”）」の祝福の水と「聖餐 (“communion”）」のパンの象徴と読む (12)。彼によれば、洗礼は、キリストが磔による死から復活したように、登場人物たちにも「新しい命の道 (“newness of life”）」⁽¹⁰⁾ を歩ませるものであり、聖餐は、最後の晩餐で弟子たちがこれから犠牲となるキリストから与えられたパンを食べたように、登場人物たちにも「天から下ってきて世に命を与える……神のパン (“the bread of God...which cometh down from heaven, and giveth life unto the world”）」⁽¹¹⁾ を食べさせその人生を蘇らせるものである (12-13)。さらに彼は聖書から引用しつつ、子供は「完全な信仰の象徴 (“the emblem of perfect faith”）」であり、ゆえに子供のいないパン屋は「霊的な死 (“spiritual death”）」に陥り、ユダヤキリスト教的倫理に反しワイス夫婦にいたずら電話をしてしまうが、ワイス夫婦は、「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい (“as I have loved you, that ye also love one another”）」⁽¹²⁾ という掟に従いパン屋を許し、彼らは最終的に「霊的復活 (“spiritual rebirth”）」を果たすことになる、と解釈する (12-13)。

しかし先に論じたように、ワイス夫婦にとってパン屋との面会が、子供の死に対する感情を慰め、本当の復活になっているか疑問である。また、パン屋もこのワイス夫妻との面会によって生まれ変わったのか、疑問である。パン屋のいたずら電話は、予約を無断でキャンセルされたと思ったからであり、それほど悪質ではないし、スコッティーが死んだと分かっていたら電話はしなかったはずで、初めから事情が分かっていたら理解ができ、人に対する共感を忘れてしまった非情な人間であるとは言えないのではないか。つまり、夫婦との面会后生まれ変わるほど人が実質的に変わった訳ではない、とも考えられないか。

したがって登場人物たちの人生がいかによりキリスト教的世界観にのっとっているかをさぐるよりも、パンを食べることが聖餐であり、入浴が洗礼であるという、儀式面でのパラレル関係の指摘を大いに参考にしながら、彼らの儀式的信仰行為に焦点を絞って、儀式面でのパラレル関係をさらにさぐりながら、彼らの信仰行為がいかによりキリスト教の儀式と重なるかを指摘することとしたい。

まず、信仰行為とは、作中でどのようなレベルで描かれたものとしてとらえるべきだろうか。スタルが指摘するように、作中のエピソードにはかなりキリスト教的知識を意識していると思われる事物が散見される。しかし、そのつながりが作中で明言されるわけではないし、人物たちが教会に通って聖職者立会いのもとキリスト教のはっきりとした儀式を行なっているわけでもない。彼らに関与するのはあくまでどの人間でも体験しうる出来事であり、そして、その出来事はその中に儀式上の信仰行為と重なるような行為が確認されるというだけである。それゆえ、作中の出来事の意味を作品の背後に読み取ったキリスト教的知識の点から説明し、そのような観点から意味を縛り付け、そしてキリスト教の教えにのっとったものへと作品の意味をゆがめてしまう危険性があるとして、そのような解釈をさほど良しとしない見解が当然生じる。ランドルフ・ラニヤン (Randolph Runyon) は、人物たちがパンを食べる最終場面で、「自力で神の介入なしに、本当の、しかし純粋な人間同士の交わりを達成し (“achieve, on their own, without divine intervention, a genuine but purely human communion”）」、「彼らはそうするのに神を必要とはしないし、カーヴァーはそれを描くのにキリスト教への回心を必要とはしない。 (“They don't need God to do it, and Carver doesn't need a Christian conversion to write it.”)」 (150) と述べている。これは、人物たちはキリスト教がなくてもそれに代わることを日常生活の中で経験することは可能であり、神もキリスト

教への回心も必要ではない、という対宗教的、無宗教的価値観に作家や作品が基づいているとの理解であろう。しかし、拙論「『レイモンド・カーヴァー』というアメリカを追いかけて (1)」で触れたようにカーヴァー自身は敬虔なキリスト教徒ではないが結婚式は教会で行い (112)、これまでも見てきたように主要な登場人物たちは、権威に反発せずそこからこぼれ落ちそうになりながらすがりついている人物たちである。そのような人々であるから、宗教に関しても人物たちが、宗教に代わるものを日常の中に自力で発見し宗教が不要であることをすら示していると言うよりも、宗教のない日常においても、彼らが気づけば宗教と同じようなことをしてその行為にすがりついていたと言うほうがふさわしい。権威に対する「対立」よりも「従属」のほうが強いのである。その場合、キリスト教と作品世界はあくまで別物であるから作品がキリスト教信仰に基づいていることを前提とした寓意的解釈は律するべきとの自制は解かれ、キリスト教的象徴性を可能な範囲で作中に探ることが求められることになる。ただ、スタルのように作品を、一見何の関係もないものにかこつけてそれとなくある意味をほのめかす一種の寓話としてのみ受け取るのではない。儀式上の信仰行為はもともと、人間による日常の行為から生まれたものであろうから、むしろ、寓意的要素を持ちながら、さらに信仰行為の萌芽を原初的に日常生活のなかに探った物語として読む。

さらに、登場人物たちの人生自体がいかにキリスト教的であるかを探る読みに限界があることはすでに指摘したが、信仰により彼らの人生にどんな結果が生じるかよりも、信仰という行為そのものに描写の力点が置かれている。神も聖人も現れない。奇跡も起きない。世界も創造されない。人間の信仰の行為がどのように生活の中で起こるのかに焦点を当てている。思索の中身でなく信仰の行為そのものにスポットがあてられているため、例えば祈りに神の到来や救済が伴っているか、あるいは祈りの中身がいかに神秘的であるかといったことは、この作品では重要ではない。祈りの言葉を口に出してみたり、自らに言い聞かせるよう何かを誓ってみたり、他人に懺悔したり、他人の告白を聞いて許したり、風呂に入ったり、共に食事をしたりと、抽象的な思索や感覚を抽象のままにとどめず、他人との関わりやより具体的な行為という目に見えやすい形態の中に持ち込んでゆき、中身が伴っていないとも、あるいは中身と多少食い違うようなことであったとしても、ともかくその具体性に頼る、つまり、原初的な形の儀礼的・儀式的信仰行為の原型にすがっている、と言えるだろう。

それでは、この「原型」とはキリスト教とはいってもどの宗派の信仰行為の原型だろうか。カトリックだろうか、あるいはプロテスタントだろうか。

作中での登場人物たちの行為を「儀式」ととるなら、彼らは司祭により遂行される宗教的儀式を一般人の身分で行っていることになる。カトリックではそのようなことは許容されないであろうが、司祭なしには聖書解釈すら許さないカトリックの教会の権威に反発して、マルティン・ルター（Martin Luther）の宗教改革では、だれでも司祭になれる「全信徒の祭司性」が主張されているから（深井 59）、そのような点ではこの話はプロテスタント的であると言えるかもしれない。しかし、媒介なしで神に到達し得る個の信仰心の敬虔さを称揚するような方向へは向かない。また、アメリカ社会の原動力になったプロテスタントの一派ピューリタンの信仰に見られるように、世俗的なものを乗り越え一気に神的な物に達せんとする苛烈で神秘的で野心的な信仰は感じられない。信仰心の強さというよりも、この物語は上述したように、儀式的営みに対するこだわりが強い。

プロテスタントは教会の権威を強めうる儀式に否定的で、秘跡もまったく排除したわけではないが、洗礼と聖餐の2つしか認めていない（深井 58）。『オックスフォードキリスト教辞典』によれば、秘跡は、キリスト教徒が「一定の象徴的な行為をとおして」「『キリストの秘儀』に参与する手段」であり、カトリックの秘跡には、洗礼、堅信、聖餐、悔悛、終油（病者の塗油）、叙階、婚姻の7つがある（「 sacrament」）。スタルの指摘のようにパンと風呂は2つの短編のタイトル兼主題にもなっていて比較的強く秘跡をにおわせている。しかしそれ以外にも、秘跡と読み込める行為やエピソードがあり、ほのめかされる度合いの濃淡は感じられるが、以下解釈を試みる（語義については『岩波キリスト教辞典』を参照した）：

終油（病者の塗油）—病者に油を塗って回復を祈るもので、12世紀ころから次第に臨終の病人しか対象としなくなったため長い間「終油」と呼ばれていた（白浜）。病者に対する祈りがやがて油を塗るといふ儀式に発展したものと推測される。ワイス夫妻はスコッティーが亡くなるまではひたすらベッドサイドで彼が回復することを祈っている。

堅信—洗礼の際の聖霊の恵みを再確認し、キリスト教信者であることをより明確にするもの（山岡）。妻のアンは、息子の回復を願う時、「どうやってお祈

りをするか忘れちゃったと思いかけていたんだけど、思い出したわ。目をつむって『お願い神様、私たちを、スコッティーを助けて下さい。』って言いさえすれば、あとは簡単よ。気づいたら言葉が出ているの。(“I almost thought I’d forgotten how, but it came back to me. All I had to do was close my eyes and say, ‘Please God, help us — help Scotty,’ and then the rest was easy. The words were right there.”)」(Cathedral 67-68) と言う。キリスト教の信者であることを確実にする儀式のようにたいそうなものではないが、おそらくかつてはキリスト教の信者であったもののいつしかお祈りの仕方も忘れてしまったアンが、再び「神様」と口ずさみ、神に対する信仰を言葉で表明し、キリスト教の信者であることを確認した瞬間であるだろう。

婚姻—文字通り、結婚式のことであるが、これも作中で結婚式が行われるとか、それに類する出来事が行われるということはない。ただ、アンが前述のように祈りの言葉を口に出した後、夫ハワードにもお祈りすることを勧め、彼がすでにずっと祈っていたことを伝えたとき、アンはこう思う。「初めて彼女は2人が一緒にこの問題にかかわっていると感じた。これまでは彼女とスコッティーだけの問題にしていたことに気づいてはっとした。ハワードはずっとそこにいて必要とされていたにもかかわらず、彼女は彼をその中には入れていなかった。彼女は彼の妻でよかったと思った。(“For the first time, she felt they were together in it, this trouble. She realized with a start that, until now, it had only been happening to her and to Scotty. She hadn’t let Howard into it, though he was there and needed all along. She felt glad to be his wife.”)」(68)。形式的に夫婦であるだけでなく、息子の交通事故という一大事においてこそ、人生を共にするものとのつながりを再認識しているような場面である。「この人の妻でよかった」という思いとともに、結婚した時の誓いの気持ちを今になり確認し、再認識しているという意味では、結婚式の再現ともとれないか。

悔悛—信者が自らの罪を告白し、司祭を通して神の許しを受けるもの(岩島)。作中では、洗礼と聖餐を除けば、これが最もキリスト教的儀式として読み取りやすいエピソードである。言うまでもなく、パン屋が己の行為を恥じワイス夫妻に謝罪し、夫妻が許す最終場面である。

叙階—司教、司祭、助祭の職務につかせる儀礼(百瀬)。「悔悛」の儀式が、パン屋が懺悔し、夫婦がそれを許すという構図であれば、夫婦は懺悔を聞きな

がら、それを許すものになっている。許しをあたえるのは、司祭であるから、「悔悛」の儀式が夫婦には、許しを与える司祭へ地位を昇進させる叙階の儀式にもなっているのではないか。もっと言えば、夫婦にパンを与え、そして、夫婦に懺悔を聞かせることで彼らを司祭に昇進させたパン屋も、そうすることで司祭の立場に昇進しているのでもあり、最終場面はパン屋とワイス夫婦が互いを昇進させ合っているとも言えるだろう。

以上、作中の儀式色の濃淡はあるものの、プロテスタントが認めた2つのみでなく他の5つの秘跡についても、それらを象徴するような言動や出来事が作中に見て取れる。とすると、プロテスタントからカトリックの価値観まで遡っているということにはならないか。

ここで、プロテスタンティズムがどのような経緯を経て誕生しどのように発展していったかを、大きなテーマでありながら大変手際よくまとめた、深井智朗の説明をつなげ、分かりやすい表現も部分的に借りつつ、キリスト教の歴史的流れを追ってみたい。

もともと一神教であるユダヤ教の一分派であったキリスト教は、パレスチナに誕生し地中海世界に広がった後、313年にはローマ帝国の宗教となり、それから北上し中心を地中海世界からヨーロッパへと移していった(3-5)。ヨーロッパへの移動の過程でキリスト教は、多神教的ローマ帝国の世界に順応し、「日常の様々な場面で神々の力を感じていた人々」に適応して、自ら変化しながら西洋に融合していった(4)。キリスト教のさまざまな聖人への信仰は、神話の神々への信仰の置き換えとして生まれたものだった(4)。

中世にヨーロッパへ広まり、16世紀の神聖ローマ帝国の時代になると、教会の権威はすっかり強まり、「教会がこの世から天国までの通行をより厳格に整備し、制度化して」おり、「これまで緩やかに認められていた教会以外の超自然的な力は次第に否定される」ようになっていた(9)。教会は権威を手に入れたことで儀式・儀礼等を通じた宗教行為を利益目的で提供するようになる。そうした世俗化の典型例が、贖宥状の発行であった。贖宥とは、7つの秘跡のうちの一つである悔悛において、告白を聞いた司祭により与えられた罪を償うための罰を、教会側が代行するというものである(13-14)。悔悛は洗礼後に犯した過ちを自覚し悔い改め懺悔するというもので秘跡のうちでも最も重要な儀

式であったが (12), 「万が一, 罪を告白する前に, あるいは罪の許しの代価として与えられた課題を果たす前に死んでしまったらどうするのか」という人々の深刻な不安にこたえるため, 罰を聖職者が肩代わりするシステムを教会は考え出した (13-14)。贖宥が行われたことを示す証明書である贖宥状の発行によって, 神聖ローマ帝国を市場として教会は莫大な利益を得た (16)。その慣例に抗議したのがマルティン・ルターで, 彼の反対運動をきっかけにプロテスタンティズムが生まれる。聖書に書かれてあることが教会の考えや教えに先行するという「聖書のみ」、誰もが司祭のように聖書を読み解釈できるとする「全信徒の祭司性」、そして、神からの救いは人間が努力により能動的に得られるものではなく神をひたすら信じた人間にのみ受動的に訪れるという「信仰のみ」が宗教改革三大原理と呼ばれている (57-63)。これらはすべて、人間と神の間に入り込んでいた教会を極力排しようという試みである。

しかし、改革後に普及したルター派やカルヴァン派等のプロテスタンティズムはやがて、『『改革』という立場を定着させ、自らが本来あるべき正統的なキリスト教だと主張するように」なり (101), それらの宗教改革は「反カトリック的な教えにもかかわらず、教会の制度という点では中世と全く同じであり、教会は政治的支配制度と一つであり、一つの政治制度の中に一つの教会制度が許されている」点で「カトリックもプロテスタントも同じ」であった (110)。19世紀末の神学者エルンスト・トロルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923) の分類が、それに当てはまらないものがあるとの批判を今日受けながらも、交通整理するには依然として有効とし (107), 深井はその分類に基づいて、これら上述のプロテスタンティズムを「保守主義としてのプロテスタンティズム」 (124) と呼び、それらから批判され、迫害され、「小さな、敬虔な集団の中に逃れて行き、国家との関係を回避した」 (111) 人々を「リベラリズムとしてのプロテスタンティズム」 (124) と呼ぶ。この後者に属するピューリタンが「最終的には国営の教会によって独占されていた宗教市場を自由化、あるいは民営化しよう」として、イングランドから新天地アメリカへ移住し、それゆえ「アメリカではリベラリズムとしてのプロテスタンティズムが主流派になった」 (167-68)。教会は国家から切り離され、「一つの自発的結社として、一つの民間団体として、宗教市場で自由な競争が可能」となり、この価値観はアメリカ社会の構造設計において大きな意味を持つことになる (172)。つまり、宗教にとどまらず、経済、教育、政治など社会のいたるところに競争原理が導入され、

市場化・民営化が促進される。アメリカがやがて世界にまで広げることになった民営化の動きの源流を、深井はこの「リベラリズムとしてのプロテスタンティズム」に突き止めている（177-78）。

以上の流れを、作品分析につなげるべく個人的な解釈を加えながら、まとめ直してみる。

西洋人とキリスト教の出会い、「日常の様々な場面に神々の力を感じ」させることを許容する寛容な側面ゆえに可能となったのであり、出会った当初はもともと神と人間の距離はより近かった。やがて教会とその儀式・儀礼が世俗化・形骸化し、人々と神の間にある道が本来両者の行き来を手助けするはずの教会にかえて阻害されるような状況になる。その後のルターの改革によりその道にある障害は極力取り除かれ距離も近づいたかに見えた。

プロテスタンティズムを突き詰めたピューリタニズム主流の国アメリカでは、その距離はどうなっただろうか。「保守主義としてのプロテスタンティズム」の教会制度では、「人々は教区の教会制度の中に生れ落ち」、「生まれた学区にある小学校に子供を通わせることが親にとって自然であるように、国によって定められた教会で子供は必ず洗礼を受け、その教会の会員になる」（深井173）。しかし、アメリカでは、市場原理に基づき教会が互いに競争をし、「町のメインストリートにいくつもの宗派の教会があって、人々はそれを自ら選んで一つの教会に行く」（178）。教会は与えられるのではなく、自分で自発的に選ぶものとなる。例えば、私立学校がお互い競争する社会であれば、いい学校に通える生徒はより社会で成功しやすくなるように、学校だけでなく生徒もその競争原理に巻き込まれる。同様に、宗教においても教会のみでなく、一般の人々もその原理に巻き込まれることになる。アメリカの「自発的結社」においては、「加入者の意志が重要」であり、「入会や洗礼の際の信仰と人格についての資格審査は厳しくなり、教会は選ばれた聖なる集団として、自立していると同時に、自己批判を持ち、訓練をほどこし、切磋琢磨しながら神の国を待ち望む歴史の旅を続ける集団となる」（174）。つまり、そのような社会では、弱い教会が淘汰されるのみでなく、信仰心の薄い「弱い」個人も「淘汰」され教会からあふれることになる。プロテスタンティズムの考え方は、教会の仲介を極力取り払い個人と神の関係を簡素化しようとした点では、神と人間の関係を近づけたと言えるが、一方で、プロテスタンティズムの考え方を突き詰めていったアメリカでは、救われる個人は神を信じるものすべてではなく、信仰心において「実

力」を持った者に限定されており、宗教的に「実力」のない者あるいは「実力」をつけようとする意欲のないものにとってはかえって、神との距離が遠ざかっていた、とも言える。

「ささやかながら助けになること」の宗教観はこのプロセスを先頭までさかのぼっている。上述のようにピューリタニズムのような信仰の苛烈さはなく、アメリカ人の物語ではあるが、アメリカの社会を構成したともいえる「リベラリズムとしてのプロテスタンティズム」の価値観を体現するような人物たちではない。彼らは信仰面において、神を信じるも信じないも個人の意思に任されたがゆえ、教会へも行かずお祈りの仕方も忘れてしまったような、ある意味気づいたら競争に取り残されていたような人物たちである。社会全体にまで波及した自由競争の価値観が行き詰まった60年代という時代に、個人の信じる力の強さをうたった物語はふさわしくない。すでに述べたような儀式的行為の描写への関心からも、カトリック的宗教観まで遡っていると考えられる。しかし、カトリックといっても、それはルターが批判した、儀式が世俗化してしまったころのカトリックではなく、もっと前のギリシャ神話的多神教信仰の名残があるころの、神と人間の間を教会の儀式がもっと素朴に素直に手伝っていたころのカトリックである。そのような意味で、この短編はキリスト教的世界観の中でも、アメリカ人とキリスト教が出会ったころの信仰の原型ではなく、西洋人とキリスト教が出会ったころの信仰の原型が読み取れる物語である。

先の、なぜパン屋に会いパンを食べなければならず、それがなぜ「救い」になりうるのかという問いに答える。パン屋はただのパン屋ではない。ワイス夫妻と聖餐、告解、叙階の儀式を行う者であり、パン屋との会話はキリスト教の儀式だったのだ。様々な儀式をそれまでも行ってきた末、3つの儀式が重なる最終場面は、ようやく「救い」が訪れた瞬間だったのだ。宗教であるから、その儀式は実質的に人を救う神秘性はなくても、「救い」として提示されなくてはならない。実質性をともなっていないのは、その儀式は、自力では神に到達することの難しい個人に対し、その到達を素朴に助けていたころの儀式の原型だからである。素朴であるがゆえに、そのような儀式においては、救いが実質的なものであるか厳格に突き詰めるよりも、まずは儀礼的ポーズをとることの方が先であり、ポーズをとっているうちに何となく救われたような感じになっていた、というのが「ささやかながら助けになること」の結末で起きたことだろう。そのような文脈には、ひき逃げ犯や医者からの謝罪のような息子の死に

より直接関与している人物からの働きかけよりも、謝られても子供が死んだことに対する怒り自体は何も変わらないようなパン屋の話を聞くことの方が、より適合するのである。

聖餐のサクラメント (Sacrament) の物語の出所となった町は、奇しくもカリフォルニア州のサクラメント (Sacramento) である。サクラメントと言えば、19 世紀中ごろにジョン・サッター (John Sutter) が植民地を建設し金鉱発見にともなうゴールドラッシュで栄えた町として有名であり、夢をつかもうとする人々をたきつけアメリカンドリームを過熱させた町である。夢をつかむ者の町というポジティブかつ典型的な「アメリカ的」概念を体現するような町としての原点をさぐるならサッターが入植したところになるだろうが、しかし、町の名の由来となる出来事が起こったのは、もっとさかのぼり、サッターが入植する前にスペイン人が探検してこの地を訪れた時となる。「サクラメント」という名称は町の西端を流れるサクラメント川 (Sacramento River) にもともと与えられたものがやがて近くにあったその町についても使われるようになったが、1808 年にスペイン人探検家ガブリエル・モラガ (Gabriel Moraga) が、鳥や魚が豊富に生息する美しい自然に囲まれたその地域を探検し、葡萄の蔦の絡まった木々の枝で頭上を覆われた川岸を歩いていた時、シャンパンのような周囲の空気を飲み込んで、「これは聖餐のようだ。 (“This is like the Holy Sacrament!”)」とつぶやいたエピソードが由来になっているという (Holden 9)。

以上、カトリックがかつて神の現れを感じそれが町の名の由来となった場所で、60 年代の宗教的難民ともいえる一般人が、行き詰ったアメリカ社会をそれまで動かしてきた新プロテスタンティズム的信仰でなく、原点回帰しカトリックの信仰にすがる物語、として「ささやかながら助けになること」を読んでみた。

《注》

- (1) 以下本文中に掲載の写真は、2013 年度の本学在外研究員期間に、著者自身が撮影したものである。
- (2) メアリアンは 63 年の春と夏のころの状況についてこのように語っているが、サヴィオがこの運動に加わったのは 64 年の 10 月で、反体制学生運動の口火となつたとされるマリオ・サヴィオ率いる「フリースピーチ運動 (free speech movement)」は大学との本格的衝突がおこる 1964 年の 9 月から始まるとされる (Rorabaugh 21)。

- (3) 奨学金について、メアリアンが1,000ドルと言っているのに対し、カーヴァーは500ドルと言っている (Gentry 35)。そしてスクレニカは1セメスターで500ドルであろうと推測する (Sklenicka 510)。
- (4) 以下アーデンアーケードの家の住所についてはスクレニカによる伝記の詳細な注512~513ページを参照した。
- (5) メアリアンは会社から車をもらったと言っている (M. Carver 203)。
- (6) 広告が出されたこととその媒体や日付は、スクレニカの伝記129ページを参考にした。
- (7) 2013年時点ではテーマパーク的な造りではなく、セーブマート (Save Mart) やトレーダージョー (Trader Joe's) など有名なチェーン店がいくつか点在しているような状態だった。
- (8) クリスティは同インタビューで、次のように語り、事故の状況が物語に似ていることを示している。「私はふくらはぎを深く切って出血しましたが、轢いた車に乗っていた母親と息子はいったん止まってこちらを見たものの、そのまま走り去ってしまいました。お父さんはそんな人がいることに驚いていました。私たちは、何度もそのことを振り返って話したものです。("I had a bleeding gash in my calf, but the mother and son who hit me stopped, looked, and then drove on. Dad couldn't get over that people could be like that. We went over that many times.")」 (Halpert 79)。
- (9) スクレニカも、カーヴァー家がマシソン通りの家に住んでいた時の出来事として、クリスティの交通事故に言及している (114-15)。
- (10) スタルが同論文12ページで「ローマ人への手紙」6章4節から引用した言葉。
- (11) スタルが同論文13ページで「ヨハネによる福音書」6章33節から引用した言葉。
- (12) スタルが同論文12ページで「ヨハネによる福音書」13章34節から引用した言葉。

引用文献

- "Architectural Tours — Touring North Arcata." *Historical Sites Society of Arcata* (http://www.arcatahistory.org/architectural_tours_arcata_north).
- "The Beatnik Cop's Other Blonde Talks." *San Francisco Chronicle* 13 May 1961: 1+. Burns, Maryellen, and Keith Burns. *Lost Restaurants of Sacramento and Their Recipes*. Charleston, SC: American Palate, 2013. Print.
- Carver, Maryann Burk. *What It Used to Be Like: A Portrait of My Marriage to Raymond Carver*. New York: St. Martin's, 2006. Print.
- Carver, Raymond. *Will You Please Be Quiet, Please?* 1976. New York: Vintage, 1992. Print.
- _____. *What We Talk about When We Talk about Love*. 1981. New York: Vintage, 1989. Print.

- _____. *Cathedral*. 1983. New York: Vintage, 1989. Print.
- _____. *Fires: Essays, Poems, Stories*. 1983. New York: Vintage, 1989. Print.
- Cave, Damien. "Kerouac's Mexico." *New York Times* 11 Oct. 2013. *New York Times*. Web. 11 Sept. 2017 <<http://www.nytimes.com/2013/10/13/travel/kerouacs-mexico.html>>.
- Charters, Ann. *Kerouac: A Biography*. Thetford, Eng.: Lowe & Brydone, 1973. Print.
- Gentry, Marshall Bruce, and William L. Stull, eds. *Conversations with Raymond Carver*. Jackson: UP of Mississippi, 1990. Print.
- Halpert, Sam, ed. *Raymond Carver: An Oral Biography*. Iowa City: U of Iowa P, 1995. Rpt. of ...*When We Talk about Raymond Carver*. 1991. Print.
- Historical Sites Society of Arcata*. Historical Sites Society of Arcata, n. d. Web. 12 Sept. 2017.
- "Historic Arcata." *Historical Sites Society of Arcata*. <http://www.arcatahistory.org/historic_arcata/victorian>
- Holden, William M. *Sacramento: Excursions into Its History and Natural World*. Fair Oaks, CA: Two Rivers, 1988. Print.
- Kerouac, Jack. *On the Road*. 1957. London: Penguin, 2000. Print.
- Meyer, Adam. *Raymond Carver*. New York: Twayne, 1995. Print.
- Raudebaugh, Charles. "Beatnik Cop' Slain by Wife — With his Gun." *San Francisco Chronicle* 12 May 1961: 1+.
- Rorabaugh, W. J. *Berkeley at War: The 1960's*. 1989. New York: Oxford UP, 1990. Print.
- Runyon, Randolph Paul. *Reading Raymond Carver*. 1992. New York: Syracuse UP, 1993. Print.
- Saltzman, Arthur M. *Understanding Raymond Carver*. Columbia, SC: U of South Carolina P, 1988. Print.
- Sklenicka, Carol. *Raymond Carver: A Writer's Life*. New York: Scribner, 2009. Print.
- Stull, William L. "Beyond Hopelessville: Another Side of Raymond Carver." *Philological Quarterly* 64.1 (1985): 1-15. *ProQuest*. Web. 11 Sept. 2017.
- "Town & Country Shop Center Is Near Completion." *Sacramento Bee* 20 Sept. 1946: 4.
- Wolfe, Burton H. *The Hippies*. New York: New American Library, 1968. Print.
- 岩島忠彦. 「ゆるし」. 大貫.
- 大貫隆, 他編. 『岩波キリスト教辞典』東京：岩波書店, 2002.
- 「サクラメント」. 『オックスフォードキリスト教辞典』. E. A. リヴィングストン編. 木寺廉太訳, 東京：教文館, 2017. Print.
- 白浜満. 「病者の塗油」. 大貫.
- ビュアン, イヴ. 『ケルアック』井上大輔訳, 東京：祥伝社, 2010. Print.
- 深井智朗. 『プロテスタンティズム — 宗教改革から現代政治まで』. 東京：中央公論

新社, 2017.

百瀬文晃. 「叙階」. 大貫.

山岡三治. 「堅信」. 大貫.

余田剛. 『『レイモンド・カーヴァー』というアメリカを追いかけて (1)』. 『言語と文化』第 12 号 (2015): 87-114. Print.

(アメリカ文学／法学部教授)